

平成二十三年 三月十一日

あの日 あの時

私と爺ちゃんは、部屋でお茶飲みをしていました。ところが、何とも言われない大きな大きな揺れ、私は すぐ出口の戸を開けに 走りました。

すでに、ママが開けていたので 柱と戸に両手を掛けて掴まりましたけど、揺れが激しくて恐ろしくて大声で

「爺ちゃん！逃げて！」

と言って私は 裸足で道路に 走り出しました。1
でも、爺ちゃんは来ないので 心配していたら私の姿を見て 着る物と、靴と杖を持ってきました。何時もなら杖がないと、歩くのも やつとで走るのなんて 予想も出来なかったのです。人は、いざという時は誰でも そうなるのかと思いました。

八十八年の人生の中、こんな大きな揺れを一度も経験したこともなく 何度も揺れが

あるので、一段 高い所と思い 公園に上がって行きました。

皆さん大勢非難して来ました。

でも、私の次男達は 姿が見えないので心配をしていたら嫁さんが犬を抱いて来たので

「お父さんは？」

と聞いたら

「東部漁協に、会議で行っている」

2

と言うので 八幡丸の事もあるので 心配して待っていたら、急いで帰って来たようで 船に乗り沖に出たい様子で ロープに手を掛けたけど間に合わないと思って止めて、公園に上がって来ましたので 何事も命には代えられないと思ひ安心しました。

まさか、あんな大きなのが来るとは 誰も予想はしていません。

その中に、皆で

「大きなのが来るぞお！ 来るぞお！」

と言っている時、洞口さんの爺ちゃんの大声が

聞えたので、私が見に行ったら 嫁さんが下の方に

下りて行く所なので

「何処へ行くの」

と聞いたら

「車を上げに行く」

と言うので

「今 津波が来るよ！」

と言っても耳も貸さず、歩いて下ろうとするので

私は大きな声で

「金さえ出せば 車は買えるが

命は買わない！」

と、怒鳴りました。

そしたら、その時 私の怒鳴る声の後を振り返り

ながら 下って行った方は、亡くなりました。

3

一時避難はしても、何か用事があつたかも・・・

その姿が目には浮かんで 悔しくて仕方がないです。

人生 紙一重とは、本当に此の事です。

一度、避難したら 後戻りは駄目。

欲を出しても駄目。

あの黒い波、見たこともない沖の海の底、

地獄を見たような魔の海、

部落何百の家と船を、一呑みにして・・・

人がする事なら 止める事も出来ようが、

自然のなす事故。只、

「あれえ！あれえ！」

と、茫然と見ているだけ・・・

皆、今迄 築いた財産が 一瞬のうちに呑み込まれ、

尊い四十三人の命まで・・・泣いても涙が出ないとは

此の事、悲しさ 悔しさが残るだけ・・・

日も暮れかかる頃、今度は百人以上の避難した人達

4

に、炊き出しの準備。公園では、火を焚いて暖を取る準備。消防の人達は、水を探して 洞の沢より水を運び、電気も来ないので、コタツもなし。反射式のストーブ一台、毛布 布団はあただけ出し、皆、ごろ寝。寒い一夜を過ごしました。

食事は 両隣三軒、わが家と、芳賀さん 久保さん、皆 米を出して 一日二食、冷蔵庫にある物全部出して 食べさせました。

5

市役所に勤めている孫の様子が分らず、私達は気掛かりで 本当に食べる物も 喉を通らず、でも親二人は 其の振りを おくびにも出さず、皆の世話で一生懸命でした。其の時の 親の気持ち、どれ程 心配して泣いた事か・・・
二日目、孫のように可愛がっていた猫のトトロが、朝五時頃 帰って来たのです。皆で大喜び！

今度は 夕方隣の芳賀さんが、孫が役所の前を

歩いていたと言うので、驚いて大喜び！でも、会わないうちにはと 思っていたら、三日目 朝早く、無事 顔を見せに 帰って来たので、私は縫って大泣きをしました。

親は、はかり知れぬ程の 安心だったと思います。

本当に此の時は、神様仏様に 手を合わせました。

「何か食べて。」

と、言ったら

6

「皆 何も食べてないから

自分だけ食べられない。」

と言って、何も口にしないで出て行きました。

本当に先に立つ人達は、一生懸命でした。

何もなくても 無事であればと、此の時 つくづく思いました。

それから昼近くに、水海の公民館に移動になること

になり、歩行出来ない人は タンカで、私もタンカに乗るよう言われたけれど、出来るだけ

お世話をかけたくないと思い、歩くことになり 皆鉄道を歩き、私も爺ちゃんと民子さんの支えで 歩いたけれど、二回も線路に横になり、最後は消防の方達のお世話になりました。

水海に着いてから 私は少し、具合が悪く 娘達が迎えに来てくれ、心配していたお父さんも 会社で無事だったので、一安心!

本当に皆 無事だったので、胸を撫で下ろした気持ちでした。

商店には 何も品物は無く、ガラガラでした。

八幡平の娘達が、米・油を持って来たので 助かりましたけれど、爺ちゃんも買い出しに 八幡平に行つて来ました。

遠野より 娘達の知人から、私達の分迄 おにぎりを 二日間持つて来て下さいまして、本当に感謝しま

した。

それから 四ヶ月と九日、八幡平と松倉を 行ったり 来たり 厄介になり、口では言われない程の世話になり、親も子も 大変でした。

何処も同じですけど、電気・電話が外の部落より遅く、一番大事な水が飲むことが出来ず、一年経つてようやく今年の三月、飲むようになり 其の中ずつと仮設から運んでいました。

私達は去年の七月二十二日に、仮設に入りましたけど、家があるので入る時は 全部自分で買って入りました。

両石は 二百五十軒ばかりの中、残り十五軒、現在住んでいるのは五軒、人数は十三人です。

皆さん 命があつて 健康であれば 何でも出来ます。

「家があるから、そんな事を言う」

と言っている人もあるけど、私達は何度も災難にあ

って、其の度 皆さんに助けられ、今があるのです。
私達は、先の見えた人生です。どうぞ此の大きな、大
きな出来事を忘れず、後世に伝えて下さい。

一日も早い 復旧・復興をお祈り致します。

最後になりますけど、改めて犠牲になられた方々の
ご冥福を、お祈り致します。

日本国内、世界中の皆様 多くのご支援 9

誠にありがとうございます。

厚く御礼申し上げます。

平成二十四年 五月 記

釜石市両石町

瀬戸洋子

川柳

亡き御魂 母にそよ吹く 千の風

魔の海にのまれし御魂、今何処

忘れえぬ 悲しみ背負い 早一年

被災して 愛と絆の 深さ知る

復興か 移住か

「何十年も積み上げてきた津波対策が一瞬で崩れた。もう住めないかもしれない」。集落約200世帯のほとんどが被害を受けた岩手県釜石市両石地区。明治、昭和の津波を教訓に裏山を切り開き、防潮堤も整備したが役立たなかった。この地での復興か、移住か。漁村の住民は困難な課題に直面している。

28日、避難所となっている釜石市の体育館。両石地区の町内会長ら約10人が車座になって集落の将来を話し合った。消防や漁業など各団体でつくる「復興対策委員会」を設置し、住民の意向を聞くことを決めた。市中心部から車で約30分

釜石・両石地区



釜石市両石地区の釜石市が津波にのみ込まれた岩手県釜石市の両石地区
—28日、稲垣撮影

の両石地区。両石湾に面し、6級の津波に襲われ、住民の多くはツカメ漁などで生計を立てる。1896年の明治の大津波では11・約800人の約9割が死亡した。存亡の機にさらされたが、地域のまとめ役が誰かが、地域のまとめ役が誰が墓を守るのか。ご先祖様に申し訳が立たない」と呼び掛け、復興させた。87年には奥が約6・3級の防潮堤を9・3級にかさ上げし、最終的には12級にする計画だった。

町内会によると、11日の津波は海面から約20級の高台も襲い、家屋などをのみこんだ。残ったのは十数軒だけ。住民約500人のうち、死者・行方不明者は四十数人に上る。「高台の住宅地に避難した高齢者5人ほどが、安心してお茶を飲んでいたら津波にのまれた」との証言もある。

漁船や加工工場を失った漁師は収入の道を断たれど、50代の漁師は「われわれは失業保険がない個人事業主。また年金もなく、仮設住宅に入っても収入はゼロ」と頭を抱える。

漁師の久保隆治さん(70)は「涙の人間は涙でしか暮らせない」と再生に希望を託すが、ある漁師は「防潮堤を超え、学校の体育館よりも高い30近い津波が来た。すべてを失い、もう住めない」とため息をつく。

住民の半数以上は住宅ローンの借入れが難しい60歳以上の高齢者だ。夫が行方不明の女性(70)は「ここに戻ってくるかどうかまだ考えられない。集落復興は難しいのでは」と指摘した。

瀬戸元・町内会長(66)は「先人は無理と言われたこの集落を再建した。その意気込みをわれわれも持たないといけない。浜根性で何とか復活させたい」と話す。

防潮堤破られ住民苦悩

【稲垣淳、阿部弘賢】